建築史上の２つの経験

三上訓顯

本報では、筆者が今年経験した２つの建築上の歴史経験について述べている。第１はロシア連邦共和国の世界遺産ギジ島のティンバー構造の木造教会の修復現場を訪れ、その修復方法とギジ島教会に関する歴史、地理、制度、修復方法に関する研修プログラムに参加した。第２は、沖縄県浦添グスクの 3DCG による想像復元の試みである。浦添グスクは 13 ～ 14 世紀頃の沖縄に存在した大型グスクである。しかし、その城壁や建築群は江戸時代の薩摩軍の侵攻と第二次世界大戦、および戦後の都市化の中ですべて失われている。そこでこれまでの発掘調査による知見と学術文献を用いて、浦像グスクの城壁及び当時の建築群の想像復元をおこなった。

これら２つの経験を経て歴史建築物における修復と復元とは相補的概念だといえる。特に復元における設計という視座や方法は、歴史建築物の解明には有効である。

キーワード : ギジ島教会、ティンバー、浦添グスク、修復、想像復元、設計

1. はじめに

私のような都市開発を専門とする人間が過去を振り返り建築の歴史に関わるというのは珍しいことだが、今年は２つの歴史的建築の経験をした。

１つはロシア連邦ガレリア共和国オネガ湖のギジ島にあるロシア正教会「プレオプラジェンスカヤ教会」である。このロシアバロック様式の木造建築は、我が国の工法でいうところの校倉造りと類似しており、丸太を積層させたティンバーと呼ばれるこの地域固有の特徴ある構造でつくられている。プレオプラジェンスカヤ教会は、1714 年に建設され、その後冬用の「ボクローフスカヤ教会」と鐘楼が併設され、図１で示した３つのギジ島建築群が 1990 年世界遺産に登録されている。現在プレオプラジェンスカヤ教会の建築は、後述する特色ある方法で修復工事が進められている。さらにこの教会周辺には、ロシアの民家建築が移設されギジ島博物館になっている。

私は、このギジ島博物館が主催する研修プログラム [注 1] に筑波大学大学院世界遺産専攻の研究者らのチームと一緒に参加し、ギジ島建築群や周辺の教会について３泊４日間の研修プログラムを受講した。

２つは、沖縄県浦添市にある浦添グスク (沖縄では城をグスクと呼ぶ) の想像復元に関する経験である。13 世紀～ 15 世紀初頭にかけて浦添グスクは沖縄の中部を支配していたが、その後首里に都がうつり以後沖縄全土を 500 年にわたり統治し続け固有の琉球王朝文化を築いてきた。そんな首里王朝の前身といえるのが浦添グスクである。だが浦添グスクの姿をさぐることは、現在の私達にとっては不可能に近い。というのも浦添市が現在浦添城址公園として整備が進めているが往事の姿を示す歴史的資料が皆無に等しいからである。そこで筆者は僅かな手がかりと大胆な想像力

図 1.　ギジ島建築群

を用いて琉球王朝創世記の頃の浦添グスクの想像復元ができないかとする仮説のデザイン研究を行ったのである。

本報では、これら２つの建築上の歴史的経験について述べてゆくことにする。

2. ギジ島の教会の研修プログラム

世界文化遺産に指定されたところでは、必ず研修プログラムがあり、その世界の遺産たる価値について勉強させられるわけだが、それは我が国とて例外ではない。

表１は私達が受講したギジ島博物館の研修プログラムの講義・演習内容である。午前中は、私達が滞在していたゴ

図 2.　ギジ島位置図

表 1.　研修プログラム

	Time	English Description	Japanese Description
11-Aug	14:00	Arrival ay Kizhi Island,meeting. Accommodation. Organization and information issues.	ギジ島到着。博物館学芸員と打合せ。オリエンテーション
	14:30	Lunch	昼食
	15:15	Instruction on safety requirement,visiting rules and modes established on Kizhi Island	ギジ島でのルールや安全要件について説明会
	16:00	Excursion around the main exposition	博物館の展示を視察
	17:30	Lecture Kizhi Architectural Ensemble:history of creation,space and planning solutions and aetistic featutes of the atructures(main exposition)	講義:ギジ島建築アンサンブル:構造物、立地、計画、芸術性について
	19:30	Dinner	夕食
	hotel	Gogolevsky House	
12-Aug	8:30	Lectur: vFeaturesof the Russian wooden architecture	講義:ロシアの木造建築の特性
	10:15	Coffeebreak	珈琲ブレイク
	10:30	Lecture:WHS Kizi Pogost. WHS management	講義:WHSのギジ島木造教会管理
	12:00	Lecture:Current Russian legislation in the field of cultural heritage protection	講義:現在のロシアの遺産保護法制度
	13:15	Lunch	昼食
	14:00	Presentation:"Japanese wooden architecture and peculiarition of restoration"	プレゼンテーション:日本の木造建築と復元もの特殊性について
	15:15	Reatoration of the Chuech of the Transfiguration.Visit to the church(main exposition)	教会の変容と修復について、現地視察。
	16:30	Lecture:Constructive element of wooden structures(main exposition) ・Types of foundation. Reinforcement and repair of footing and foundation: ・Types of traditional roofs.Nail and nail-less roofing.Rehabilitation of historic wooden roofs: ・Types construction and restoration of window door Fillings	講義:木造教会の構成単位 ・基礎、補強と修理 ・伝統的な屋根、釘と釘なしの屋根、歴史的な屋根の修復 ・窓扉フィリングの修復
	19:00	Dinner	夕食
	hotel	Gogolevsky House	
13-Aug	8:30	Lecture:wood technology.Natural and geographical features.	講義:木造技術、自然的地形的特性
	12:15	Lunch	昼食
	13:15	Practical training:Reatoration works in the Carpenter center	演習:大工センターでの修復作業
	14:15	Lecture:Traditional carpentry and joinery tools.Basic carpentry techniques	講義:伝統的技術、技と道具
	15:15	Practical training in the Carpenter center: ・Traditional carpentry joints and structures(using a teaining model) ・Basic techniques for nail-less structures jinction ・Basic techniques for nail-less structures junction ・Methods of wooden members restoration(prosthesis,reconstruction,replication,etc) ・Walls restoration techniques (reassembling,suspension,lifing,etc.). Correction of walls deformation	大工センターでの演習 ・伝統的木造建築の接続や構成 ・釘無し組み立ての基本技術 ・木造メンバーの修理方法(補修、再建、複製)などの方法 ・壁の修復技術(再組立、サスペンション、リフティングなど)、壁の変形の補正
	18:15	Dinner	夕食
	hotel	Gogolevsky House	
14-Aug	9:00	Lecture:＜Kizhi Necklance＞. Architectural features of the monument of the WHS "Kizhi Pogost"buffer zone historical settlment(by boat)	講義:「ギジネクレス」世界遺産建造物の建築特性やバッファゾーンの歴史的と集落の視察(船で)
	12:00	Lunch	昼食
	13:00	Summing up.discussion of cooperation prospects,certificates awarding	討議:結論と証明書授与

ゴロブスキーハウスで歴史、自然、地理、建築工法、文化遺産の管理方法などついてギジ島博物館の学識経験者らによる講義であった。午後は修復工事現場や工房を訪れ、現場責任者から修復の具体的な方法やティンバーという独特の工法についてレクチャーを受けた。

当時の講義録を読み返すと、この地域に多数算出する唐松を用いたティンバーという言葉が目立つ。我が国ではログハウスという呼び習わし方がある。丸太を積層させて壁をつくる工法は、断熱性がよく寒冷地の土地ならではの作り方である。ギジ島の周辺では、こうしたティンバーと呼んでいるログハウススタイルの教会が多い。それを加工する道具の説明もあったし、寸法のモジュールが人間の手を左右に広げた幅など身体寸法を用いている。言い換えれば豊富な木材とこの土地の気候風土に適った建築工法なのである。

私が興味を持ったのは、プレオプラジェンスカヤ教会の修復方法である。図３［注２］にその修復過程を示した。教会を６層ぐらいのレイヤーと考えると、そのレイヤー毎に下から上へと修復をしてゆく。こうした壁部材を部分的に取り外して修復してゆく工法である。その間上部構造物は図4で示したようにジャッキによってリフトアップされ、教会内の鉄骨足場に固定されている。従って教会の外観は修復カ所が抜けた状態にみえる。私達が訪れたときは下から５層目のレイヤーのあたりだから修復工事も後半だといえよう。

取り外された壁部材は、敷地に隣接する大工センターに運び、図５のように再度組み立てが行われ、大工、木材の専門家、世界遺産修復の専門家の３者でどこをどの程度まで修復するのか、あるいはしないのかを相談するわけである。この過程が修復工事の中では最も難しいところだというのが現場大工責任者の話である。修復カ所は丸太部材１本を取り替える場合、あるいは部分的に挿し木のような方法で新しい木材と交換する場合とがある。教会は、世界文化遺産だから、修復は必要最小限度というのが原則のようだ。こうして構造耐力を回復し修復された部材は、教会に運びこまれ再度組み立てられる。この工程が終わると次の上部のレイヤーへ取りかかるといった具合に修復作業は下から上へと暫時的に進められてゆく。

我が国の文化財の修復では、建築全体を解体する方法が多いが、ここでは暫時的に進められてゆくことが特徴である。また丸太と丸太が重ね合わさる部分には、指物が使われておらず、丸太の一部を欠いただけであったし、釘を使わないと言うことがこの建築の特徴であるから、丸太の自重で構造的に支え合っているのだろうと思われた。ちなみ

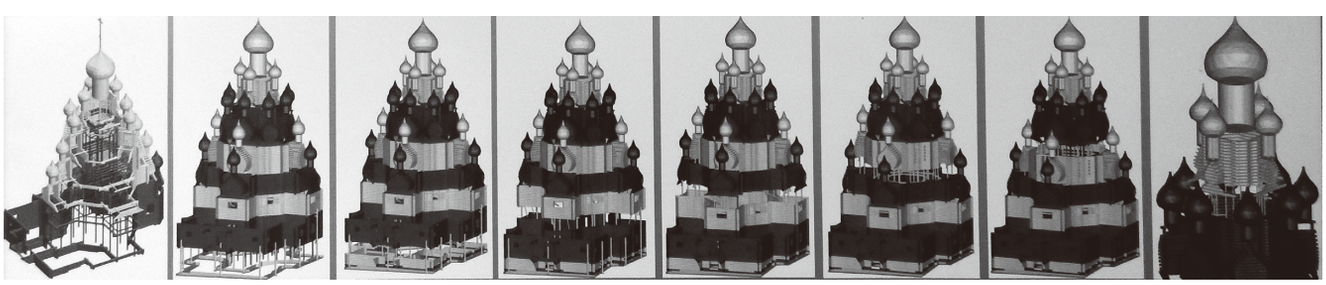

図３．　修復過程（左から右へは時系列順）

図４．　修復中の教会内部

図５．　工房で修復中の壁面部材

に球形のドームは構造及び外壁の瓦状のものを含めてすべて木製である。

このようなレクチャーを受け、最後に受講賞が手渡される。こうして私達は、ギジ島教会の総括的な知識を手にすることができた。とくに建設現場での見学は、興味深かった反面、最後までギジ島教会の図面が出てこなかった。やはり私達が一番欲しいのは、この図面なのだ。それも1/100の縮尺で、平面図、立面図、断面図ぐらいはほしかった。

ロシア、ウクライナのティンバー様式の教会を視察している頃、私の頭の中にもう一つの歴史建築物のイメージが浮かんでいた。それが歴史的手がかりすら希薄な沖縄の浦添グスクである。

3. 浦添グスクの想像復元

週末に沖縄でダイビングをすると、減圧症防止のために24時間は飛行機に乗ることができない。その空いた時間に沖縄の歴史を読み解くうちに、数多くの城壁跡があることに気がついた。図6は、沖縄県の城壁跡を文献［注3］にもとづいて記したものだが、現在確認できるだけでも72カ所ある。そのなかでも首里城、中城城跡、座喜味城跡、勝連城跡、今帰仁城跡は、城壁だけが残されており世界遺産に登録されている。

そんな数多くのグスクの中で私は、国指定史跡の浦添グスクに着目した。浦添グスクは、首里統一王朝時代の前の時代の大型グスクであり、一定の繁栄をしながらも現在では城壁すら残されていないからだ。それこそ3DCGで想像復元してみる価値があるのではないかと考えたからである。本章では、浦添グスク想像復元の過程を、現在の城壁案、歴史背景、建築群としての考察、想像復元について、復元作業の時系列順に述べてゆくことにする。

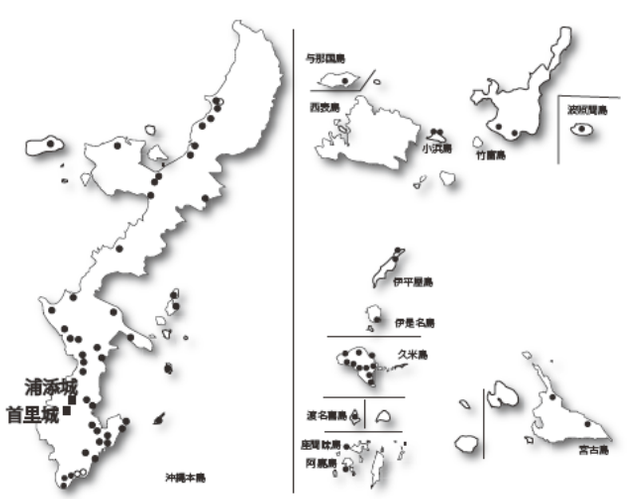

図6.　沖縄県のグスク跡［注3］参照

3.1　地形と城壁案について

浦添市は、首里王府最初の都であり歴史的には意味深いが、1609年に薩摩軍の侵攻を受け浦添グスクの建築自体が消失してしまったこと、また第二次世界大戦時に日本軍がここに陣地を設けていたため米軍の艦砲砲撃を受け現在ではグスクの城壁すら残されていないこと、さらには戦後の都市化で城壁周辺が小学校や民間墓園や住宅地として造成されたため地形自体も大幅に改変している。

他方で浦添グスク跡から高麗瓦などが出土するなど、往事の建築群の存在を伺う事ができる。そこで3DCGを用いて浦添グスクを想像復元ができないかと考えた。というのも細々と続けられている遺稿調査や歴史家の証言を待っていては、私達はいつまでたってもその往事の建築的姿をみることができないからだ。

そこで大胆な方法であるが、今出土している瓦や当時の王府としての機能などを建築的に考察し、おそらくこれぐらいのグスクが建っていたとする仮説の立案を試みることにした。それは今後あきらかにされる史実とは違う場合があるかもしれないが、すくなくとも議論の素材の1つになるであろうし、また浦添市民が建築的姿を希求していることは浦添市の担当者から聞かされていた。

1996年浦添市教育委員会は、今後30年余をかけて浦添グスク跡の復元及び周辺の公園整備を目的とし「史跡浦添城跡整備基本計画書」［注4］をまとめた。その中で遺稿発掘調査にもとづき浦添グスク壁の位置を推定要素はあるがあきらかにしている。これを示したのが図5の浦添グスク城壁復元図であり、さらに模型として表示したのが図6.である。

現在沖縄県には首里グスク、中城グスク、座間味グスク、勝連グスク、今帰仁グスクの5つのグスクは、いずれも13～14世紀巨大グスク時代を象徴する世界文化遺産である。こうした巨大グスク時代を考慮すれば、浦添グスクが小さかったはずはない。それでは、日本本土でも見られない巨大グスクが何故14世紀の沖縄に登場してきたかとする理由は、歴史家の研究を待つほかないが、本稿では巨大グスク説に従って先に話を進めたい。

整備計画書の浦添グスク城壁案を図7、図8で示した。これらはランドスケープアーキテクト山口洋子氏［注5］、前沖縄県立博物館・美術館長安里進氏［注6］によって制

作されたと聞く。これを本報では1986年案と呼ぶことにする。

その後の浦添市教育委員会による継続的な発掘調査から城壁の位置や屋根瓦の出土状況から城壁の再現案が再度出されているのが図9である［注7］。これが現時点では最新とみられる城壁案だと判断し、本報ではこの案を2006年案とよぶことにする。2006年案の地形図は、沖縄戦で艦砲射撃を受け地形が改変される前に撮影された戦前の航空写真をもとに制作された地形図を用いていること。また出土した屋根瓦の位置からおおよそ本殿の位置が類推できる可能性があることから、私は最新の情報である2006年案をもとに浦添グスク建築群の3DCG想像復元を進めることにした。

図10は、首里城と浦添グスクの城壁を同縮尺・同方位で示したものである。首里城は文献［注8］からトレースしている。浦添グスクでは1986年案が最初の城壁案であり、2006年案は、その後の発掘調査から導き出された城壁案をトレースしたものである。

グスク壁から空間軸を推察すると、浦添グスクは南東-北西軸、首里城は東西軸となっており比較的類似している。

図7. 浦添グスク復元図 1986年案［注4］より引用

図8. 浦添グスク復元模型 1986年案［注4］より引用

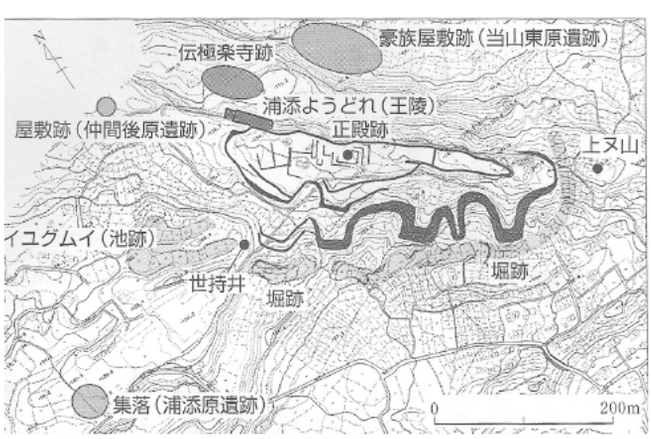

図9. 浦添城壁復図 2006年案［注7］より引用

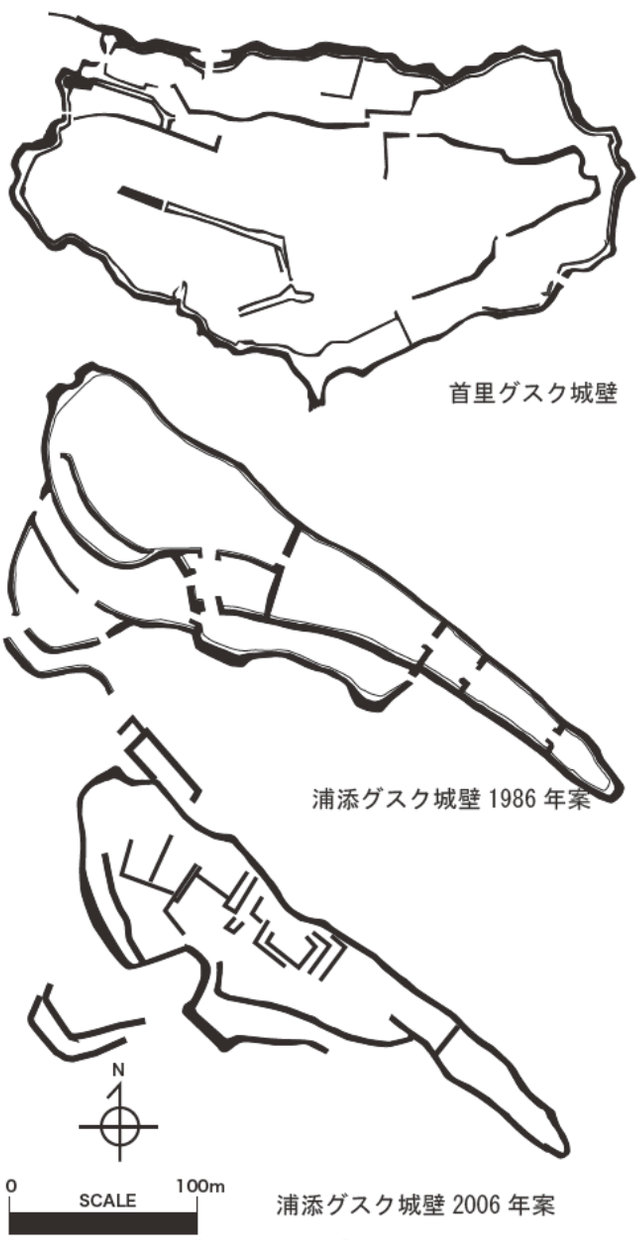

図10. 首里グスクと浦添グスクの城壁の規模比較

さらに地図で確認すると浦添グスクの南東軸の延長上には古代からの信仰対象である久高島が存在している。

またCAD上で測定した城壁で囲われた部分の面積は、首里39,728㎡、浦添グスク1986年案が21,608㎡、同2006年案が15,392㎡となり、琉球最大の首里城と比較すればいずれも大型グスクであったことがわかる。

首里城は、王朝時代の交易や明との冊封体制下における使節団の接待空間などのしつらえが必要であり、琉球最大規模のグスクにしていったであろうことは容易に伺える。他方浦添グスクは、そうした機能が首里城程の規模ではないが、それでも領地内の防衛や事務的管理や交易のスペースは必要であったと考えられるし、他の城と比較しても大規模グスクであったことが伺える。

また各グスクの全長をみると浦添1986年案が首里同様の長さであり、浦添2006年案は若干短く、ただし城壁の一部が未発掘なためか加筆されていない部分がある。

3.2　浦添グスクの歴史背景について

浦添グスクをめぐる歴史について琉球の歴史と併せて整理したのが表2の年表［注9］である。この表にもとづき琉球の通史的な歴史に言及しておくことにする。

沖縄にグスクが登場するのは、12～13世紀である。この時代農業と東南アジア諸国との交易で得られた富を基盤として地方領主である按司が登場し、互いに貿易や利権や領土の拡大をめぐって争った時期があった。按司達は争いつつより勢力のある按司へと収斂されてゆき、やがて今帰仁グスクを居とする北山、浦添グスクを居とする中山、南山グスクを居とする南山の三大勢力に収斂され三山時代を迎える。

こうした歴史過程の中で浦添グスクが登場するのは舜天王統(1187～1260年)［注10］からである。続いてその子英祖王統(1260～1350)［注11］の時代に那覇周辺諸島勢力の入貢など勢力を周辺に拡大していった様子がうかがえる。さらに察度王統(1350～1406年)［注12］が登場した頃から浦添グスクが大型化し、中国洪武帝が鍍金銀印を贈ったり、高麗をはじめ宮古・八重山に入貢したり、また明に王族を派遣し国土監で学ばせるなど、海外との交流が盛んであったことがうかがえる。1404年に明の第3代皇帝永楽帝が冊封使を派遣し、察度王の息子である武寧は琉球ではじめて冊封［注13］された。こうした経緯から、1406年南部佐敷出身の尚巴志・思紹親子が襲来し、武寧の部下は尚氏に味方するなどの内乱状態があった事が伺える。結果的に武寧は戦いに破れ居城である浦添グスクを下城し、その後の所在はわからない。

こうした内乱状態を経て思紹が1406年に中山王に即位し、尚巴志が北山の今帰仁グスクを滅ぼし中山王に即位する。その後も南山の南山グスクを攻略して三山を統一し尚巴志を王統とする琉球王朝が現在の首里に成立してきたわけである。この頃浦添グスクから現在の首里グスクに王府を移したと歴史は伝えている。以後1872年に明治政府の琉球藩を廃止し沖縄県となるまで琉球王朝は首里で続くことになる。

つまり当時の有力勢力である浦添王府と琉球統一を成し遂げた首里王府とが大きな琉球の歴史の流れである。このように琉球の勢力は次第に寄り大きな勢力へ収斂され結果として統一王朝が首里で成立したとする収斂説が歴史の構造だと理解できる。

こうした通史的収斂構造の中で浦添グスクが果たしてきた役割に着目した安里進氏の研究［注14］は興味深い。先ず浦添グスクと首里グスクの類似性を指摘しているので、以下に引用する。

「首里城と浦添グスクは、巨大なグスクというだけではなく周辺に寺院・王陵・貴族や豪族の屋敷・苑池といった王都的な施設が配置されるという特徴がある。ここが、今帰仁グスクや大里グスクなどの巨大グスクと決定的に異なる特徴だ。今帰仁グスクや大里グスクの周囲には、寺院、王陵、苑池などの施設は確認されていない。」

こうした指摘を踏まえると実際浦添グスクには、王陵が存在しており現在はこれが復元されている。その周囲には、関連する寺院、苑池が確認されており、首里に都を移す以前に浦添グスクが琉球の王都の中心的空間の一つとして存在してきた可能性を示唆している。首里城の原型が浦添グスクであったとする考え方である。

さらに浦添グスクの発掘調査により出土された鉄器や金具を制作した金属工房の跡、白磁玉縁腕の破片、漆塗板厨子の破片、透彫宮殿型舎利容器と同年代の花菱型笠鋲、屋根瓦、釘、脚先鑛金金物などは往事の浦添グスクの繁栄を示唆するものであるが、これらの出土品の放射性炭素年代測定法やシンチレーション法により年代を測定すると13世紀後半～14世紀初頭、改修が15世紀前半と年代が明確に分かれていることをあきらかにしている。

これらの出土品から判断すれば、その頃大規模なグスク

と王都が浦添に形成され、国王は大きな権力を持って琉球に君臨していた可能性が高い。実際首里城７代目国王尚寧王が浦添ようどれに葬られるなど特別な意味を後の時代まで浦添グスクが有していたと理解する方が適切だろう。それは浦添本家と首里分家の関係とする見方もあるだろう。実際首里城と浦添グスクとの間には、当時石畳の道で結ばれており、首里王朝になっても両グスクの関係性が続いていたと理解できる。

そして安里氏は、図 11 に示したように浦添ようどれと

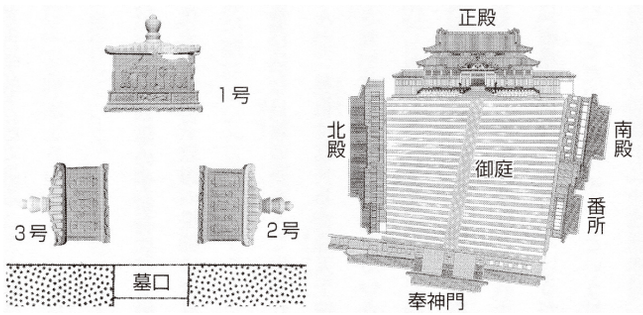

図 11.　浦添ようどれと首里城の配置［注 7］p59 引用

表 2.　歴史年表

	浦添グスク		首里城	
	約 4000 年前浦添貝塚が形成される			
	1229　英祖誕生	1187 中山浦添王府（十代）：瞬天・舜馬順熙・義本・大成・英慈 玉城・西威・察度・武寧	1243 頃　長崎の人々が宋に渡る途中で琉球に漂着	
	1260　英祖が王に即位			
	1264　久米・慶良間・伊平屋諸島が英祖王に入貢 (にゅうこう)			
	1266　大島諸島が英祖王に入貢			
	1273　癸酉年			
1300	1321　奥間大親 (うふやあ) の子として察度が生まれる			
	1333　癸酉年　この頃察度が日本商船から鉄を買う			
	1350　察度が中山王に即位			
	14 世紀後半～15 世紀前半　浦添グスクが大規模になる			
	14 世紀後半～15 世紀前半　浦添ようどれの石垣が造営される			
	1372　察度王が明に入貢 (朝貢の始まり)			
	1383　洪武帝が察度王に鍍金銀印を贈る			
	1389　察度王が高麗に入貢			
	1390　宮古・八重山が中山に入貢			
	1392　察度王が王族を明に派遣し国土監で学ばせる		1392　このころ福建の人達が琉球に帰化	
	1393　癸酉年			
1400				
1402	1404　永楽帝が武寧を中山王に封じる (冊封のはじまり)			
中国明建国	1406　尚巴志が武寧を滅ぼす	1406	1406　尚巴志の父・思紹 (ししょう) が中山王に即位	1406 首里統一王朝　第一尚氏（七代）第二尚氏（十九代）
			1416　尚巴志が北山を滅ぼす	
			1422　尚巴志が中山王に即位	
			尚巴志が「駅」(番所の前身) を各地に配置	
			1427　首里城外苑整備	
	1429 このころ尚巴志が極楽寺を前谷に移転		1429　尚巴志が南山を滅ぼす	
			1453 年　首里城全焼	
	1470　尚円王が極楽寺を浦添村に再建し龍福寺と改名		1470　金丸が尚円王になる	
	このころ尚真王の長男・尚維衡 (しょういこう) が浦添城に隠棲		1500　おやけ・あかはちの乱	
1500	1524　日秀上人が経塚の碑を建てる		1509　首里城正殿基壇の礎欄に百浦添欄干の銘をほどこい	
			1526　司掟 (あじうっち) を首里城に移住、首里城南側城壁工事完成	
	1564　尚寧が生まれる			
古琉球	1589　尚寧が王に即位			
	1597　尚寧が首里と浦添を結ぶ道を改修 (浦添城の前の碑)			
1600	1606　島津氏が琉球に侵攻			
1609	1609　薩摩郡の侵攻で浦添グスクが破壊され龍福寺も焼失		1606　島津氏が琉球に侵攻	
	1610 このころ浦添の「駅」が浦添番所に改修される		1610　島津氏が琉球国内の検知に着手	
近世琉球	1620　尚寧王が浦添ようどれを改修		1610　尚寧王が駿府城で徳川家康に対面	
	1620　尚寧王が浦添ようどれに葬られる			
	1671　浦添間切を分割して宜野湾間切が新設される (＊間切り : 琉球の行政区分)			
1700			1644　尚賢王がはじめて普天満宮を参詣	
	1759　尚寧王妃・阿応理恵 (あおりやえ) の遺骨が浦添ようどれに移される			
	1768　清明の節に国王が玉陵 (たまうどん) と浦添ようどれに参詣		1719　冊封の宴で玉城朝薫が組踊を上演	
	1768　大地震で浦添ようどれの石垣が所々崩壊			
			1771　八重山・宮古地方に大津波が襲来 (明和の大津波)	
			1771　ペリー艦隊が那覇と浦賀に来航猷	
1800				
			1854　琉米修好条約	
	1872　このころ浦添ようどれ西室の「殉死ノ者共」の骨が厨子に納められる		1872　琉球藩が設置され尚泰は藩士となる	1879
1900			1879　琉球藩が廃止され沖縄県が設置される (琉球処分)	
	1905　伊波普猷 (いはふゆう) が「浦添考」を発表			

呼んでいる王陵の3つの石厨子の配置と、首里グスク正殿周りの配置との空間的な類似性を暗示している。それはウチナーと呼んでいる御庭を囲んで成立する空間の形態が当時からあったとするものだ。こうした空間的論拠をよりどころとすれば、浦添グスクの空間的形態も次第に浮かび上がってくる。そして首里城より古く、中国の916年から1125年に基本的な空間構成がつくられ、清、明の時代に現在の姿になった三合院や四合院の民居の空間構成を連想させるのである。

大規模グスクとしての可能性を持つ浦添グスクも1606年、島津藩の侵攻により建築群が焼き払われたため、往事を語る建築上の資料は現時点では皆無である。

さらには、浦添グスク跡から高麗瓦が出土している。通例建築をつくるときは、瓦職人だけでは工事ができないので、大工、建具師、基礎を扱う石工職人、さらには塩害があるので防腐処理の職人、そしてこれらの専門職を統括できる棟梁が必要である。これらの人々がどこからやってきたのか。瓦を手がかりとすれば、特に朝貢貿易を開いた察度王のように、当時から海外交易をしていた歴史経緯からすれば、やはり韓国か中国であった可能性が高い。そこで韓国・中国の建築様式が参照された可能性はあると判断した。ただし当時の朝貢という浦添城主の関心からすれば、首里城にみられる日本固有の建築様式である唐破風はなかったと私は判断した。

3.2　建築群の考察とエスキース

12～13世紀に始まる海外交易、琉球統一過程の中での収斂構造で多くの領地を支配してゆく上で、今でいうところの行政の役割、自然崇拝という信仰形式、そして多くの従者を抱えていたであろう王宮としての役割、城壁内で暮らす人々の台所、さらに当時の身分制度、これらを考慮すれば、一つ屋根の下に多くの人間達が暮らすことは不可能であり、当然それぞれに役割を持った複数の建築群で形成されるグスクの空間的な姿が考えられる。そう考えたほうが巨大城壁を設えてきた目的にも近づいてくる。そこで浦添グスク城壁案にもとづき建築群の空間的な考察を試みた。

建築群の考察をおこなうに際して筆者は、前述した安里進氏にインタビュー［注15］をおこなった。歴史背景及びインタビューをふまえ往事の建築群の姿について考察してゆく。

琉球全体の歴史に沿って、浦添グスクも英祖王の頃から大型化してきた。それは三山が勢力を競っている時代に、浦添グスク主も周辺諸島に勢力を拡大していたとする安里説からも理解できるように、そこには大型化せざるを得ない建築的な必然性があった。当然建築も儀式祭礼を主とする本殿だけということはありえず、他領土との支配や交易に関わる事務的手続きや取り次ぎといった交易上の仕事も多数発生してきただろうし、当然グスクを守る兵士も存在した。また王家の生活をまかなう相当数の女官や従者達もグスクにいたと考えられる。こうした人達が生活を共にしていたとすれば、聖域である本殿1つでは建築的にグスクは成立できない。また琉球は士農の身分制度があったので一つ屋根の下に身分の違う人間同士が暮らすとこともあり得ない。グスクには祭礼のための空間の他、執務、防衛、そして王宮としての機能が備わっていたと考えられ、複数の建築群が存在していたと判断できる。

そこで表3は、首里城の居室機能を手がかりに浦添グスクの建築群の構成を3段階(○:存在した、△:不明、×:存在しない)で評価したものである。

先ず北殿は、主に海外交易、特に冊封士のための空間だが､明に冊封されたのは1404年と浦添王府最後の頃であり、この建築は存在しなかったと判断した。といって浦添王府は朝鮮と入貢をしていたので、交易自体は首里王府ほどの規模ではないにしても一定の規模で存在していたし、そのための居室も必要だったのではないだろうか。

奉神門・納殿は首里城では御庭の玄関部の建築だが、ここでは判断がつかないので、空間の検討の中で扱うことにした。同様に料理座は、首里では本殿城壁の外に設けられており、また佐敷殿は王妃の諸用を扱うところであり、他の建物と離れて建てられている。これらも空間の検討の中で扱うことにした。南殿や鏡の間は日本からの賓客接待の空間であるが、浦添王府は日本を特に意識した活動をしていたわけではなかったのでこれらの空間も存在しないと判断した。系図座は、浦添王府が10代しか続かなかった点から判断し存在しない。同様に用物座も貢ぎ物は浦添王府時代からあったが、首里城の配置では、奉神門の外に立地しており、空間的には他の建築でも扱えるので、存在しないと判断した。

本殿の他に存在すると評価したのは、黄金御殿、近習詰所、奉行詰所、書院、寄満、二階殿、寄満、世添殿、世誇殿、女官居室、大台所、銭蔵、金蔵そして鍛冶屋であると判断した。それらの居室は御内原とよばれる空間の王宮としての機能と、祭祀機能及び政治行政を行う執務機能としての

表 3.　浦添グスクにおける居室有無の評価

居室	首里城の使途	浦添グスクデ存在した可能性評価
正殿	王を中心とする祭祀がおこなわれた聖域空間。	○
北殿	摂政、三司官が重要事項を審議する場所、冊封司の接待の場所	×
奉神門・納殿	平時は薬、茶、煙草などを取り扱う。神女達が神をもてなすところ。	△
黄金御殿(クガニウドン)	王や王妃の居室	○
近習詰所	行政に関わる官人などの詰め所で番所に隣接	○
南殿	通年で日本式の行事がおこなわれた場所。薩摩の役人の接待所。	×
番所	行政施設の玄関、取り次ぎ、南殿と隣接	○
鎖の間	王子らが薩摩の賓客や知人を接待したところ。	×
書院	王が日常政務を執り書類の起草や行祭事がおこなわれた。冊封司の接待場所としても使われた。	○
奉行詰所	官人、奉行役人などの詰め所と推定。	○
二階殿	王の日常の居室や寝室	○
寄満(ユインチ)	王や家族の食事所	○
世添殿(よそえでん)	御内原を管轄し、王夫人の住居	○
世誇殿	王が死去したとき王位継承者が即位の礼を受ける。平常は王女の居室	○
女官居室	御内原に勤める女官達の居室	○
西の当蔵	不明	×
廊下	正殿と北殿や南殿をつなぐ。	△
寝廟殿	王死去の際の霊柩安置所	×
料理座	儀式の料理や使者、官人などの饗宴の料理を調達したしところ。	△
大台所	賓客の料理や、米、砂糖、漬物などを取り扱っていた。	○
佐敷殿	王妃の諸用を扱うところ。	×
銭蔵	金銭、酒、壺類などを取り扱った。	○
金蔵	銭倉同様の蔵だったと推定した。	○
系図座	士族の家請や王府の書類編集に関する業務をおこなう	×
用物座	中国や日本との貢物を取り扱う	×
鍛冶屋	首里城には存在しない	○

○:存在、△不明、×存在しない

建築群である。

次にこれらが存在していたとする建築群の空間的なゾーニングを地形図上で行ったのが図 12 のゾーニング・動線図である。本殿の位置は瓦などが出土した位置とすれば空間的には南向しかありえない。この当時から存在していた中国居室の三合院や四合院という建築様式、あるいは首里城の御庭の存在、また首里城に隣接していた崇元寺の御庭の存在［注 16］、あるいは今帰仁グスク 3 期の例を踏まえるといずれも御庭が設えられる空間が存在していたとみられる。自然崇拝や交易に関する儀式などをおこなう御庭の存在は沖縄のグスクにとって必要不可欠な空間だったとみてよい。そして御庭の前面には門が存在していた。浦添グスクの場合は、空間的にみれば首里城の奉神門を設けられるほどの空間的な敷地の余地はない。従って浦添グスクは城壁の門から御庭へ直接アプローチする空間だったと判断した。

こうした本殿、御庭、門に至る空間軸とし、比較的更地の多い地形に着目し等高線を考慮しながら動線を設定してゆくと、中心空間軸から左右にのびる鍵型の動線が浮かび上がる。北西側は礼拝所が今も残っているので、これを避けるように鍵型の動線が続いていると想定した。同様に南東側は地形のレベル差があるので階段状の廊下で聖域ゾーンの建築群を結びつけていたと考えられる。それは次第に建築群が上へ延びてゆく景観を呈するだろう。

さらにゾーニングを考えれば、首里城でもそうだがグスクを聖と俗とに明解に分けていることが沖縄グスクの特徴である。そうした点を考慮すると、本殿から御庭、そして門に至る空間軸に対して、北西側が執務ゾーンとして位置づけられ、奉行詰所、書院・寄満、銭蔵を配置したゾーニングとし執務ゾーンと呼ぶことにした。南東側は、王宮の機能である生活ゾーンとし、近習詰所、そして敷地のレベルが上がるため階段状の渡り廊下を介して御内原の中心的な建築である黄金御殿に至る。ここから世継殿や世添殿にいたる動線は首里城と同様である。また首里城では二階殿

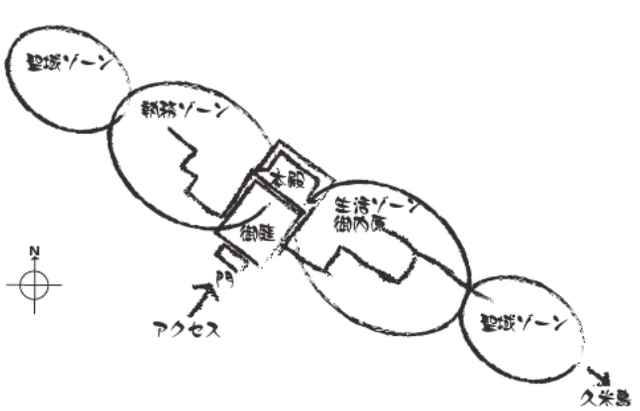

図 12.　ゾーニング・動線図

にいたる動線は黄金御殿から続き世継殿などをとおる必要はないが、ここでは敷地の制約から世継殿を経由してゆく動線としている点が首里城とは異なっている。そして最奥に金蔵を配している。尚寝廟殿は安里氏の指摘もありなかったと判断した。また料理座は首里城では本殿の城外に設けられ儀式や官人達の饗宴などに料理をつくったとするが、それは中国明との冊封体制下のことであって、それ以前の浦添グスクでは考えにくい上に空間的には難しいことから、これもなかったと解釈した。

金蔵の先は城壁で遮られ門扉などがあったであろうが、これをくぐると聖域空間が設定できる。

これらの建築群を戦前の地形図に発掘調査で明らかになった城壁の位置を配置したのが図 13 である。地形図から判読できることは 1 つの城壁内に標高 144m から 134.7m と 10m 近くの高低差が存在することが特徴的である。浦添グスクより後、14 世紀中頃につくられた中城グスクでは、それだけの高低差はレベル毎に城壁で囲い一の廓、二の廓としているが、浦添グスクでは 1 つの城壁内に高低差を納めている。また地形図には、戦前の航空写真から判読されたう複数の線状の矩形の記載がある。これらは沖縄戦によって消失しているので、それが何であったかは今もわからない。こうした地形の高低差を考慮すれば、それが擁壁であった可能性が高いと読み取った。そこで発掘調査より本殿のものとみられる高麗瓦が出土された位置をみると、この背後に擁壁状の記載がある。そこでこの擁壁状の記述に囲まれた空間が本殿の大きさだと推測した。すると本殿の大きさと位置はおのずと決まってくることになる。そこでまず最初に本殿を配置した。

次いで前述のゾーニングに従い本殿北西側の配置を検討した。戦前の地図にはディークガマと呼ばれる礼拝所が記載され現存している。おそらく当時からのものだと思われるので、この周囲を礼拝空間として設定すると擁壁で囲まれたまとまりがある空間が設定できるうえに、本殿に至る城門の手前で動線が二手に分かれ、もう一つある城門が本

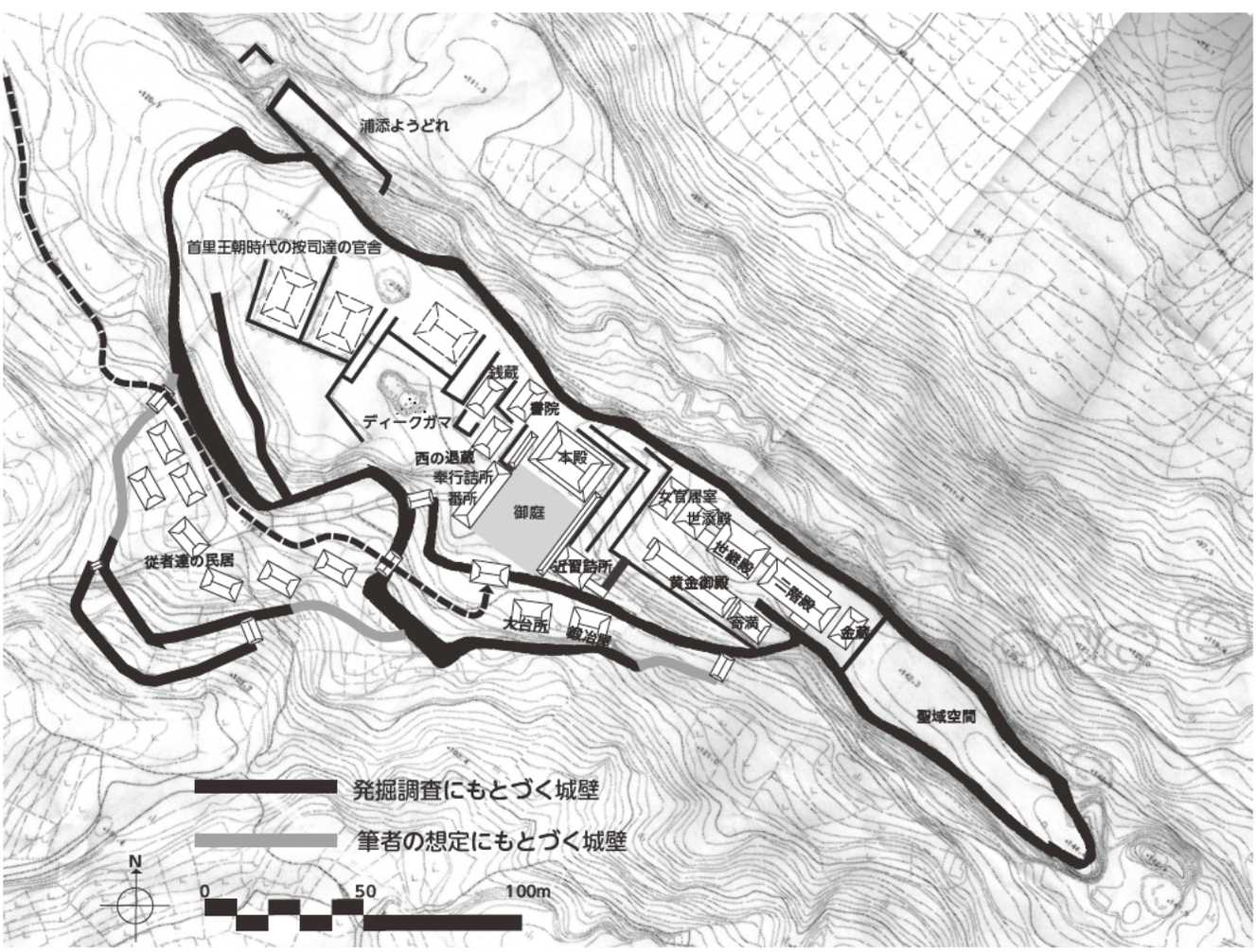

図 13. 建築群の配置図（戦前の地形図は浦添市教育委員会作成地形図による）

殿の空間を介さずにディークガマと呼んでいる礼拝空間へ直接アプローチできることから空間的な意味が発生し、この城壁や門の存在理由がみえてくる。つまり本殿を介さずに祝祭空間へアプローチする動線があったし、城壁もそれを意識して設けられたと考えられ、そのための専用の城門が必要だったのである。

ディークガマの北や北西側にも擁壁状のものが見られるが、首里城時代に浦添グスクと首里城との関係性があったことからも、後の時代に按司達の官舎が建てられたと読み取った。このディークガマを取り囲むように当時の執務ゾーンの建築群は建てられていたのではなかろうか。配置図では門に近いところに奉行詰め所や番所などを設け海外交易の事務上の仕事をしていたであろうし、そうした交易品は奥の銭蔵などに保管されたであろう。さらに王の日常の仕事場である書斎は、地形と空間からみて本殿の北西に配置した方が合理的だと考えた。

次に本殿南東側の配置について考察した。ここは御内原とよばれる王宮としての生活ゾーンであり、王をはじめとする従者達の生活空間を想定した。このゾーンでは敷地の高低差が 5 ～ 6m 程度あるので本殿よりは高い位置に建築群が配置されることから、階段状の設えで本殿と繋がっていたと読み取った。階段を上がると御内原の中心機能である黄金御殿にたどりつき、この背後には台所である寄満が付随する。黄金御殿の北東側には御内原の女官居室の建築があり、また黄金御殿に近接して 10 代続いた浦添王朝の子孫達の世添殿や世継殿といった性格の建築群が存在していたであろう。これら建築群の最奥には王の住まいである二階殿があり、その奥には宝物などを保管する金蔵があったと読み取った。こうした動線は首里城の動線に準じて配置した。これが王宮の建築群の配置であると想定した。このさらに奥には門扉を介して聖域空間があった。その先には今も礼拝対象とされている久高島を望むことができるのである。

こうした配置にすると、本殿左右の建築群にゆく際の空間的設えが必要になってくる。それが御庭の左右に設けた回廊である。それが建築的に設えられたか、あるいは石畳などのオープンな空間として存在していたか、あるいは存在しなかったかはわからない。前述した崇元寺では御庭を囲むように石畳の回廊状の道が存在している。

また当時浦像王府が朝貢交易をしており、また出土した高麗瓦と関係性があるとみられる韓国には浦添グスクと関係性あるとみられる建築様式が復元されている。韓国珍島南洞理にある南桃石城では浦添グスク同様の石垣による城壁が復元されており、さらに珍島郡内面・古都面の指定史跡龍蔵 (ヨンジャン) 山城城址の復元においても同様の建築様式をみることができる。特に近年三別抄 (サロビョルチュ) 歴史公園が整備され、その復元された御庭を囲む本殿と対殿の建築群をみると、現在の首里城につうじる建築様式が伺える。そしてその一部に回廊状の空間がある。浦添グスクは、いきなり成立したのではなく、こうした朝貢交易のなかで、その建築技術がもたらされたと考えることもできよう。

こうした海外事例を踏まえると浦添グスクでは、空間的には地形の制約もあり、南東部の聖域ゾーンへのアクセスを考えると 2 通り考えられる。1 つは本殿裏から城壁に沿って階段であがり御内原に至るアクセス。もう一つは距離を稼ぐことができるので比較的傾斜の緩い本殿南側まで下がり近習詰所を経由してアクセスする方法とである。こうした歴史的事実と空間とを併せて建築的に考えると琉球の建築ではみられなかった回廊空間が建築機能上必要になる。そこで御庭を囲んで回廊状の空間を想定した。北西側の回廊は奉行詰所に付随する回廊であり、南東側は地形の制約から回廊だけのしつらえにした。こうすることで動線自体は長くなるものの、使いやすいアクセスとなる。回廊は、日本建築では古来から用いられた建築様式であり、御庭をきっちり囲むという空間的な性格が明解になることから、ここではあえて設けた。そして回廊を介して左右の建築群にアクセスする空間構造としている。

さらに浦添市の発掘調査から獣骨が出土し、なおかつ城外の隣接地に水場があったことから、これらに隣接する位置に大台所を設けた。同様に火を扱うという点で鍛冶場を隣接して配置した。鍛冶場は、おそらく鏃などの武器を製造していたのだろう。城主は、戦の時にはこの武器を家臣に与えた。そうした城主の権力あるいは支配力の象徴の 1 つに武器をつくるという役割があったのであろう。琉球の三山統一途上にある浦添グスクにおいても、そうした軍事的活動はなされたのであろうと推測している。

周辺部から浦添グスクへのアクセスには、南西方向に石畳の道があることは既に確認されているが、これは後世首里城時代のものとみられ、北西方向から城壁に沿って本殿へアクセスできる旧道があり、こちらをアクセス動線としている。アクセス動線沿い下段の城壁内には掘っ立て柱の民居が複数あり、おそらく城詰の警護などの役割を持った下級武士達の建築があったのかもしれない。

このような配置図にすると、建築空間として明解なゾーニングと機能的役割を持った浦添グスクの姿が次第に復元できる。それは当時の歴史背景を踏まえつつ現代の建築理論によって想像復元されたプランニングである。

3.3　本殿の意匠

浦添グスクを3DCG化してゆく際に、各建築群の寸法はどの程度であったか、さらにはそれらの意匠がどのようなものであったかについての現存する資料は、首里城の建築図面［注17］が残るだけである。だが当時の日本本土での建築は現存する建築物も多々あり、また平均身長が多少違うとはいえ人間の動作や生活の所作で必要とされる空間の規模はおのずと決まってくる。そこで首里城の建築図面をもとに浦添グスク本殿の建築図面化を行った。図面化することによりその他の建築群がどのような規模であったかを探る意味でも本殿の寸法を最初に把握することが必要だと考えた。そうした本殿を画面化したのが図14である。

最初に建築空間の基本となる通り芯の寸法と柱と柱の間が何間あるかにについて検討した。同時代の本殿とみられる今帰仁グスク3期の本殿跡の礎石間の寸法を実測した。間口方向に1999.9mm(6.6尺)、2527.2mm(8.3尺)と比較的明解な寸法が得られた。次に間数をみると、間口方向に7間、奥行き方向に4間だということが現地説明板に図示されている。空間構造として建築の周囲は6.6尺の寸法で周囲を囲み、内部は8.3尺の空間で構成されていることがわかった。このことから間口16,635mm、奥行10.757mmという比較的大きな建築である。

だが疑問になるのは奥行きの4間という値である。通例日本本土の建築で偶数の間数は、法隆寺中門などの一部を除けば大変少ない間数である。日本建築の大半は間口、奥行きともに奇数であることが前提だといってもよい。それは奇数間であることの方が構造上軸組部材の構成を合理的に扱うことができ建築の納まりがよいからである。

こうした考察を踏まえると浦添グスクでは、間口方向で2,000mm(6.6尺)、中間部2,515mm(8.3尺)とし7間構成、奥行き方向は端部2,000mm(6.6尺)、中間部は2,151mm(7尺)

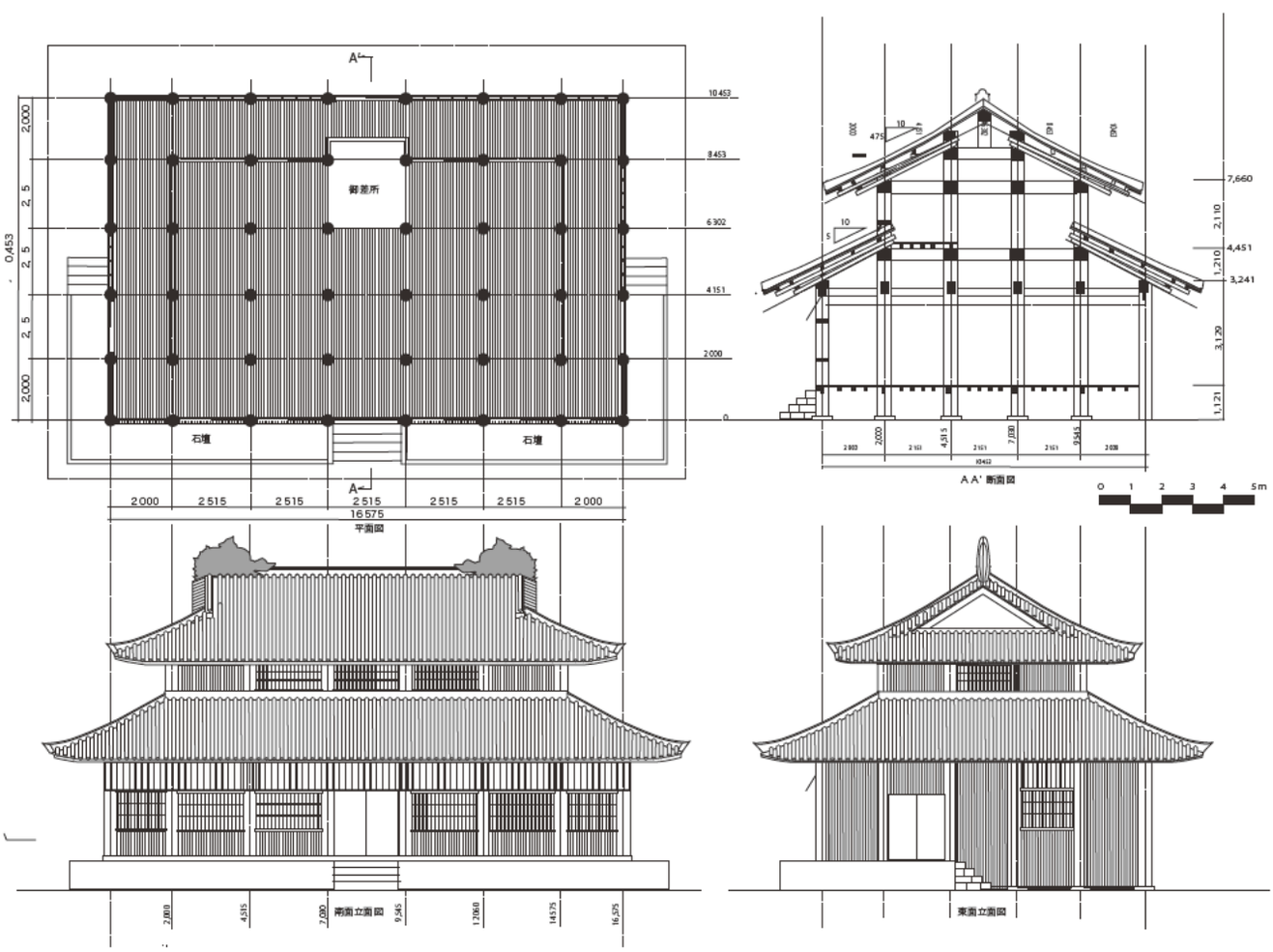

図14.　浦添グスク本殿建築意匠図

とし5間の構成とした。建築内部の端部はすべて2,000mmであるから、屋根の納まりもよい。以上の設定から建築の全長は間口方向16,575mm、奥行方向10,453mmとなる。このスケールで城壁の屋根瓦が出土し本殿とみられる位置に配置すると背後の擁壁の間に丁度おさまることから、この通り芯の寸法と間数で設定した。

次に階高は平屋とし、小屋裏から採光がとれる構造とした。階高の寸法に関する資料は皆無なので首里城本殿の寸法を参照した。柱の太さは礎石通り芯寸法から判断して1.3尺あれば構造的に耐力があることから、柱の直径400mmとしている。これも首里城同様の寸法である。こうした軸組であれば、構造的にも成立できる可能性が高くなってくる。

以上の設定を用いて断面図をつくると、柱と梁などの軸組図が予想できる。そこで3DCGで制作した軸組モデルが図15である。本土では奈良時代から続く和式建築の基本的な軸組としている。

次に外壁の仕様であるが、この頃本土で一般的な材料は漆喰の塗り壁である。だが沖縄は、風土的見地からみても塩害や台風時の風雨を考慮すると漆喰は考えられない。実際日本の民家でも塩害がある海岸部では漆喰の上を板で囲っている例［注18］や、板を焼いてかこう例［注19］が今でも見られる。従って沖縄では、板張りが原則だったと判断した。さらに塩害などを防ぐという点から判断し外壁には塗装が施されていた。それは漆をまぜた桐油朱塗りであっただろう。とすれば外壁の色は朱であった可能性が高い。外壁仕様は、板張り桐油朱塗り仕上げといえよう。

さらに屋根については、瓦の出土もあることから論拠を挟む余地はないが、屋根の端部に鴟尾があったかどうかである。屋根の端部は傾斜の違う4面の部材が接合する複雑なところであり風雨の影響による浸水や部材の破壊が予想される。そうした点を踏まえれば、部材を保護する意味においても鴟尾はあったと考えている。ただし鴟尾の形状がどのようであったかについてはわからない。また屋根端部には鬼瓦が出土されている。こうした点を踏まえると首里城の屋根に類似してくるが、それは類似性が重要なのではなく、そうしなければ沖縄の風土の中で屋根として成立できないとする建築上の事情があったと考えられる。さらには湿度との関係があるので沖縄の民家同様に床は高かった。従って地面とのアクセスのためにも石壇や階段は当然必要になってくる。

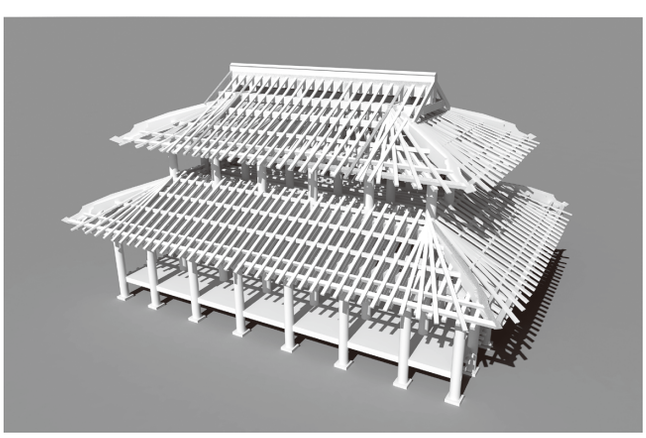

図15.　本殿軸組の3DCG(制作：名古屋市立大学芸術工学部建築都市デザイン学科4年磯貝実祐)

室内の配置は、どのグスクでも同様だが四周を回廊とし、居室の中央に御座所を設けている。柱の間が奇数であることは、建築の中央に御座所をおくことができることからも柱間の数は奇数間であったことが建築的合理性には適っている。

こうして建築図面化すると、上の窓から差し込む陽光が御座所を照らし、王の存在感を浮かび上がらせ権威と支配力を誇示する本殿らしい空間になることが図面から読み取れるだろう。

3.3　想像復元

歴史考察と建築の考察を踏まえて浦添グスクの想像復元をしたのが次頁図16である。地形図は戦前の地形図を使用し城壁は、これまでの考察をもとに建築群の想像復元をしたものである。尚遠景の3DCGは、戦後測量された米軍地形図を使用している。

これまで浦添グスクの建築上の検討と復元はしてこなかった。それは建築に関する資料が大変少ないというのがその理由だ。従ってここで提示した3DCGも、下敷とした論拠の設定の仕方によっては、また違った建築様式や配置を考えることもできるだろう。そうした点では、ここでの想像復元は今後検討されてゆく仮説の1つである。だがこうして復元してみたときに、これまで論じられてこなかった視点や建築上の議論を促進させてゆくだろうし、ここでの3DCG化は、そうした今後の浦添グスク検討のために1つの試論的素材を提供したと考えている。

そんな試論的骨格をまとめれば、建築自体は歴史資料にもとづいて新たに設計しているのに等しいわけだが、日本建築史上すでに確立されていた和小屋様式の構造、建築上こうでなければ収まらないといった部材の組み立て方、あるいは風土的条件を考えればこのようになる、あるいは空

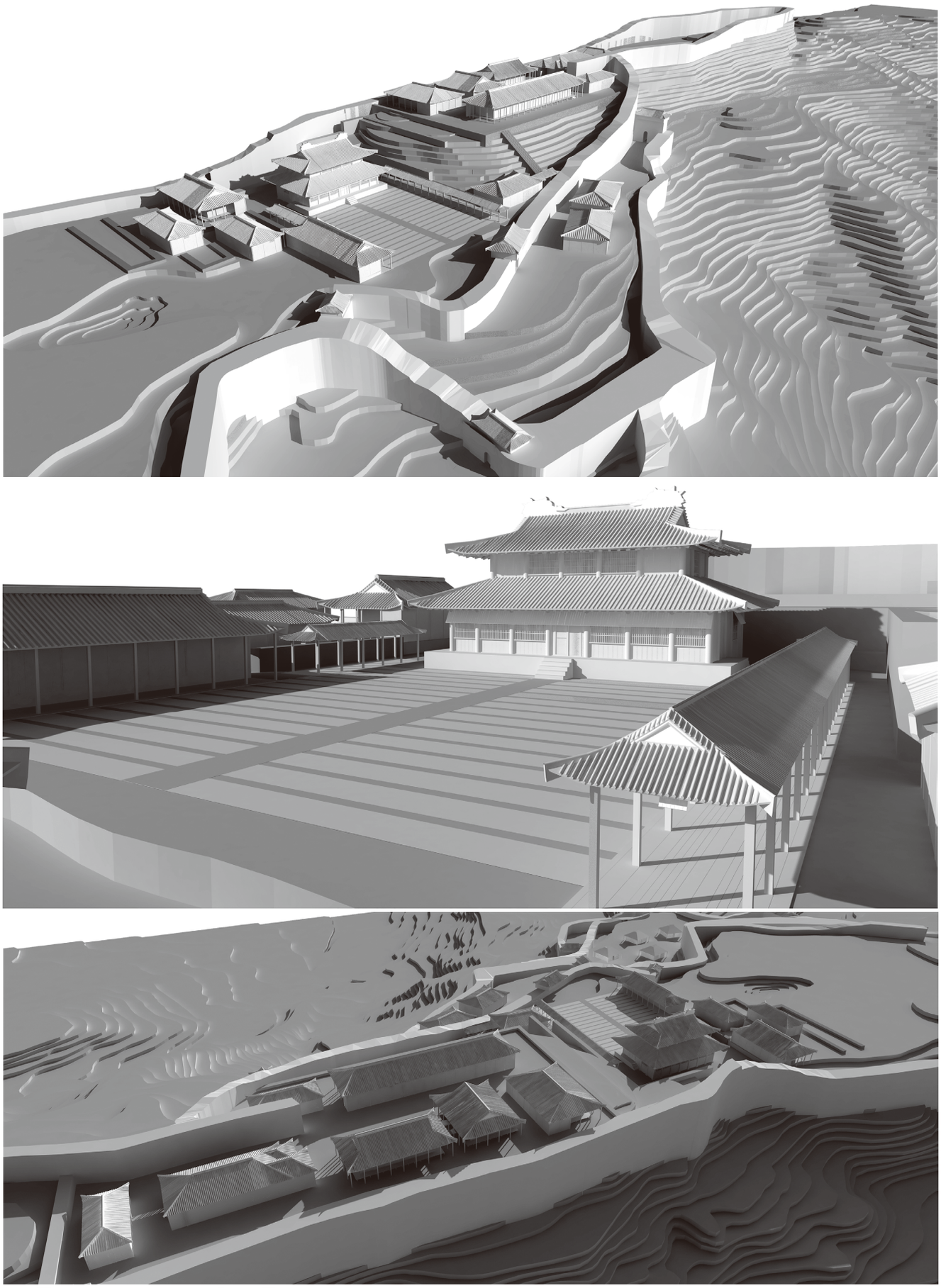

図 16.　浦像グスクの想像復元　(3DCG 制作 : 名古屋市立大学芸術工学部建築都市デザイン学科 4 年磯貝実祐)

間としてこのような形態でなければ建築として成立できないとする点にある。そしてそこには王の権威や王宮としての生活があったはずであり、そして海外交易に関わる事務的な仕事や人事的な交流といった王府としての仕事があり、そうした役割を果たそうとすれば、これぐらいの建築群あるいは居室機能が必要ではないかといった点について建築的に復元してみたのである。

そこに現代のテクノロジーを用いた3DCGによる想像復元の有効だといえる。それはなによりも全体のイメージを把握しながら、これを多くの人間達と共有しながら今後の検討や議論に供することは大変有効な歴史発掘の手段の1つだといえる。

4.　まとめ

本報では2つの歴史建築物の2つの事例について紹介した。最初は現在残されている歴史的建造物をどのように維持し継続してゆくかとする施工技術の課題、後者は過去に存在していた建築群をどのように再現するかという論拠とである。歴史建造物を扱う場合この2つの事例は相補的で対局的な位置づけが考えられる。

図17は、歴史建築物における保存と復元という2つの概念を図化したものである。保存は建築が今も存在しているから、後世に残そうとする操作が必要になりどちらかといえば保存や修復の技術がとわれる。結果として施工技術志向の体系が存在している。他方復元は現時点では建築が存在していないのだから、出土状況を含む歴史、その土地の風土、建築様式、当時の工法、そして当時の生活様式あるいは機能的課題の検討が必要になる。

そうした検討結果にもとづいて設計という方法論が試論的ではあるが復元の場面で有効であるという結論を得た。私達が暮らしている環境や風土は。歴史の流れのなかでそれほど大きく変化してきたわけではない。むしろ一定の条件下で人間の暮らしが成立してきた。当然建築様式もその時代に普及していた工法で、構造や仕様が決定されている

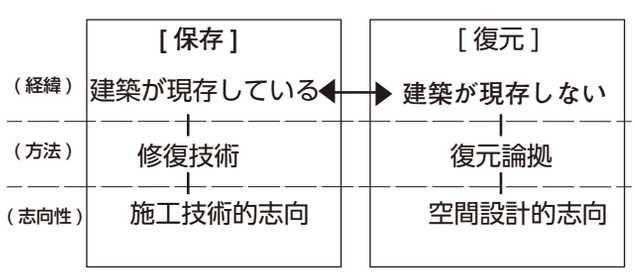

図 17.　歴史建築の概念

わけであるから、そうした点を踏まえれば歴史建築物の仕様をある程度類推することが可能だといえる。環境や空間に対する設計という方法あるいは設計時の考え方によって復元を試みる方法が、歴史建築物の解読に有効だと本報では結論づけておく。

復元についてさらにいえば人工衛星による画像解析や地表面の物理的測定などをつうじて建築群が立ってきた経歴が調べられないかと考えている。浦添グスクの場合17世紀初頭に建築群を消失しており、通例建築群跡の礎石は持ち去られ民居の土台に転用されているかもしれない。そうなると建築群がたっていた痕跡がなくなってまったわけであり、それを歴史や建築学だけで探ることは不可能といえる。そこで物理学的方法を用いて地表面などのデータを採取しその差異を探れないかとする考え方もあるのではないか。そうした建築群が立ちそして立て替えられてきた経歴が明らかになれば学術的に面白いと思われる。これはいますぐに探るための方法あるわけではないので、科学技術の進化をまたなければならない。それまでは、今後の課題としておくことにする。

謝辞

本報の執筆にあたり次の方々のお世話になった。感謝する次第である。筑波大学世界遺産専攻教授上北恭史氏、摂南大学理工学部教授坂本淳二氏。浦添市役所教育委員会仁王浩司氏。

注及び参考文献

注1. ギジ島博物館が主催する2泊3日のプログラム。ギジ島の研修施設に泊まり、学識経験者らの講義と現場見学がロシア語で講述され英語の通訳がつく。講義の終わりには、受講書が渡される。

注2. ギジ島内にある木工センターの掲示物を複写した。

注3. 當眞嗣一：琉球グスク研究、琉球書房、2012。

注4. 浦添市教育委員会：史跡浦添グスク跡整備基本計画、1996。この計画書において山口氏と安里氏とで浦添グスク壁の復元案が示された。

注5.MUI計画主任技術者

注6. 沖縄県立芸術大学教授、前沖縄県立沖縄博物館・美術館館長。

注7. 安里進：琉球の王権とグスク、山川出版社、2006。尚この図版で使用されている地図は、戦前日本軍が撮影した航空写真にもとづき地形図を作成したものである。地図名：

昭和 20 年浦添城址現状平面図、2001 年 3 月調整。図版の城壁内に複数記載されているＬ字型の地型図上のラインが何であったについては、線上のものとしか判読できない。それはグランドレベルが階段壇上に造成されたか、犬走りであったかは定かではない。だがこの線上の中心から屋根瓦が出土したことを踏まえれば、すくなくとも敷地の中央部に建築があったことは確認されている。

注 8. 田辺泰 : 琉球建築、座右宝刊行会、1947。田辺泰は戦前と戦後沖縄の建築調査を実施している。戦前の首里城の建築写真が納められている。

注 9. 年表の作成は、安里進、高良倉吉、田名真之、豊見山和行、西里喜行、真栄平房昭 : 県史 47 沖縄県の歴史、山川出版社、2004、の他浦添大公園資料館展示の年表を参考にした。

注 10. 王統とは王の血統という意味であり、舜天王統は次の王の即位で構成される。舜天 (1187 ～ 1237 年)、舜馬順熙 (1238-1248 年)、義本 (1249-1259 年)。

注 11. 英祖王統は次の王の即位で構成される。英祖 (1260-1299)、大成 (1300-1308)、英慈 (1309-1313)、玉城 (1314-1336)、西威 (1337-1349)。

注 12. 察度王統は次の王の即位で構成される。察度 (1350-1395)、武寧 (1396-1405)。

注 13. 冊封とは、中国の爵号を授かり中国皇帝と君臣関係を結ぶこと。こうした冊封関係により毎年の朝貢が義務づけられると同時に中国との交易が可能となり、又中国との軍事的圧力を回避できることや、中国を背景として周辺国に対し有利な地位を築けるなどの利点が琉球にはあった。

注 13. 注 10. 安里進 : 琉球の王権とグスク、山川出版社、2013。

注 14. 注 7 の書、p37、p94。

注 15. インタビューは 2016 年 11 月 26 日 a.m.9:30-11:00、安里邸にて。

インタビューの要旨

当時の沖縄の城には、城主一族のみが起居し、それ以外の人間達は周辺の村などから通ってきた。そこが本土の城と大きく違うところである。城の周囲に集落の跡や豪族の屋敷跡がみつかっていることがわかっている。そうしたものも含めて城が成立していた。海外からの使者は城外に宿泊させていた。

城壁内は聖域的領分であり、この外側に堀や池や列冊が設けられ防衛的な意味がある構造となっていた。城壁内には、聖域である本殿、そして詰所、鍛冶屋が存在していた。

建築様式は本殿瓦葺きであり、その他の建築は屋根を板葺きとし掘っ立て柱だったのではないだろうか。建築群としては、本殿があり (首里城のような) 左右の対殿はなかったのではないか。ただし回廊だけはあったということが首里城の文献でみられる。建築の外観は、塩害を防ぐ目的でうるしを配合した塗料を塗っていた可能性もある。本殿の向きは首里城においてそれまでの南向きから西向きに変わったことを踏まえれば浦添は南向きだろう。城内の人数は、首里城が 200 人規模とすれば 100 人ぐらいが城詰めであったであろうか。

当時の中国船が寄港できる港は那覇 (現在の泊港) であろうし、首里・浦添に至る道が残されているので那覇と浦添の往来が盛んであったことがわかる。

注 16. 田辺泰 : 琉球建築、座右宝刊行会、1972。

注 17. 旧首里城の図面は次のとおり。

首里城正殿図面集 (昭和初年実測)、沖縄県立図書館。

現在の復元された首里城の図面は、海洋博物館記念公園管理財団 : 琉球王府首里城、ぎょうせい、1993。による。本報の想像復元では後者の文献を参照した。

注 18. 重要伝統的建造物群保存地区である福井県加賀市橋立地区および新潟県佐渡市宿根木地区の民家。

注 19. 滋賀県高島市などの湖西地方の民家。